



| | |
|--------------|--|
| Title | 日本語のテキストの結束性の研究：指示表現と名詞の機能を中心に |
| Author(s) | 庵, 功雄 |
| Citation | 大阪大学, 1997, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/40880 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

| | | | |
|------------|-------------------------------------|-----------------|----------|
| 【 1 】 | | | |
| 氏名 | 庵 | 功 | 雄 |
| 博士の専攻分野の名称 | 博士 | (文) | 学 |
| 学位記番号 | 第 | 13368 | 号 |
| 学位授与年月日 | 平成 | 9年8月4日 | |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 文学研究科 日本学専攻 | | |
| 学位論文名 | 日本語のテキストの結束性の研究 —指示表現と名詞の機能を中心に— | | |
| 論文審査委員 | (主査) 助教授 仁田 義雄 | (副査) 教授 土岐 哲 | 教授 真田 信治 |

論文内容の要旨

本論文は、日本語のテキストにおける結束性 (cohesion) について研究したものである。複数の文が連続するとき、それらの間には「つながり」が生じるが、そのつながりには、文法的依存関係による「結束性」と、推論による「一貫性 (coherence)」とがある。本論文で研究対象としたのは前者である。

本論文は3部12章から構成されている。

第1部は、5章からなり、本論文の理論的な枠組みをなす部分である。

第1章では、「テキスト」と「結束性」という概念について論じられている。テキストとは、意味的にまとまりをなす文（連続）のことであり、通常2文以上から構成される。結束性とは、文連続が「文法的依存関係によって」テキストを構成する時に生じる「つながり」のことである。

第2章では、結束性に関する先行研究のうち重要なものについて論じ、あわせて本論文の方法論について論じた。この内、結束性に関する先行研究の中で特に重要なのは、Halliday & Hasan (1976) であり、本論文は、基本的に同論文の枠組みをモデルにしている。本論文は、また基本的にHalliday (1985) のような機能主義的立場に立っている。その理由は次の通りである。すなわち、本論文で扱う「テキスト」は実時間に制約された存在であり、テキスト解読者がテキストを実時間内に処理できるためには予測が必要であり、その分析にとって重要なのは、ある表現が「可能（文法的）」であるか否かではなく、ある表現が「無標」であるか否かであるからである、とする。

第3章では、「文脈」について論じた。文脈は言語分析にとって重要なものであるが、本論文では、文脈を「無文脈」と「有文脈」に大別し、後者をさらに「閉文脈」と「開文脈」に分けることを提案している。各々の文脈はテキストタイプ及び分析のレベルと対応関係を持っている。まず、テキストタイプという観点から言えば、無文脈に対応するのは「文」である。一方、「閉文脈」に対応するのは、言語的文脈のみで解釈が完結する「自己充足型テキスト」であり、「開文脈」に対応するのは、言語的文脈のみでは解釈が完結せず、それ以外の状況的な知識などを参照しなければならない「非自己充足型テキスト」である。一方、上述の3つの文脈は、分析のレベルということから言えば、各々「文法性 (grammaticality)」「結束性」「一貫性」というものに対応する。前二者は、反証可能的な規則として記述で

きるものであるという点で, Leech (1983) の言う意味での「文法」に属す概念であるのに対し, 一貫性はそうした一般化が困難であるという点で「運用論 (pragmatics)」に属す概念であると言える。また, 「文脈」に関しては, 「文脈指示」についても考察を加えた。

第4章では, 名詞句のステータスに関する概念である「定(definite)」「不定(indefinite)」「定情報(definite information)」という概念について考察している。この内, 「定/不定」は聞き手の立場からの分類であり, 聞き手が指示対象を唯一的に同定できる(と話し手が想定する)名詞句が「定」であり, 聞き手が指示対象を唯一的に同定できない(と話し手が想定する)名詞句が, 「不定」である。「定」には, 世界に指示対象が一つしか存在しないことによって定になるタイプや, 指示対象が最もありそうな場合として決まるタイプがある。それ以外に, 名詞句がテキスト内で繰り返して用いられる場合もある。これが「定情報」であるが, 結束性の研究においては, 「定」よりも「定情報」の方が重要である。それは, 次のような理由による。文脈指示において考察対象となる, コ系統, ソ系統, ゼロが真正な意味で範例的 (paradigmatic) 対立をなすのは, 「定情報」であって, 「定」ではないからである。

第5章では, 結束装置について考えた。結束装置とは, それ自身の解釈を他の部分に依存することで文連続に結束性をもたらす文法的な装置のことである。日本語で結束装置として認められるのは, 指示表現と, 述語成分が述定的に用いられその必須項が表層に全ては現れていない場合, および, ノ格名詞句をその必須項としてとる1項名詞である。

第2部は本論文の記述的側面を構成する。

第2部も, 5章からなり, 結束装置としての指示表現と名詞について考察している。

第6章では, 指示表現の記述として, 指定指示として用いられる限定詞 (determiner) 「この」「その」「ゼロ」の選択について考察した。「この」は, テキスト送信者が先行詞を「トピックとの関連性」という観点から捉えていることを示すマーカーであり, 「その」は, テキスト送信者が先行詞を定情報名詞句への「テキスト的意味の付与」という観点から捉えていることを示すマーカーである。一方, ゼロの分布を積極的に規定することは困難だが, それが使われる環境を同定することは可能である, ことを示している。

第7章では, 「この」「その」「ゼロ」に関する第6章の定式化を承け, そうした捉え方と他の統語現象との相関について考察した。まず章の前半では, 「この」「その」の選択に関わる先行詞の捉え方の違いとテキストにおける「は」と「が」の選択が相関性を持つことを指摘した。すなわち, 「この」と「は」, 「その」と「が」の間に強い親和性が見られるのである。章の後半では, 指示詞「それが」「それを」について考察した。これらは, 共に先行文脈から形成される予測が後続文脈で裏切られることを, テキスト受信者に先触れする機能を持つ, と考えられるが, これらの形式がそうした予測裏切り性を持つのは, 「その一が」型が有標の逆接的意味関係を表すことによると考えられる。

第8章では, 代行指示における「この」「その」「ゼロ」について考察した。これを考へるには名詞の項構造を考えることが必要不可欠である。すなわち, 単一文中で代行指示が可能になるのは, 被修飾名詞が, ノ格名詞句を統語論上の必須項としてとる1項名詞である場合であり, ノ格名詞句を必須項としては取らない0項名詞の場合には, 単一文中での代行指示は不可能である。

第9章では, 第6章と第8章での考察を, 限定詞「この」「その」「ゼロ」の分布という観点から考察している。日本語の指示表現には, コ系統, ソ系統, ゼロが潜在的には交換可能であるタイプの対立と, ソ系統とゼロは意味を変えずに交換できるが, コ系統は非文法的になるタイプの対立が, 存在することが分かる。第9章の後半では, この2種類の対立を視野に入れた上で, 接続詞について改めて考へている。

第10章では, 第8章とは異なる意味論的な観点から, 名詞について考察している。まず, 「Aが(Bに)Cをほめられる」という構文をテストフレームにして, 名詞が自らの指示対象を確定するために他の名詞句に依存する度合い(名詞の「関係づけられ度」)を測定した。その結果, 0項名詞の中では, 「衣服」「生産物」の関係づけられ度は相対的に高く, 「所有物」「人名詞」のそれは相対的に低いことが分かった。関係づけられ度の高低は, 間接照応の許容度とも相関しており, 高いものほど, 自らの解釈を他の部分に依存するために, 間接照応が可能になる度合いが高いのである。

第3部は、2章からなり、本論文の研究史上の位置づけと今後の展望がその主な主題である。

第11章では、本論文の研究史上の位置づけについて論じている。その前提として、国内、海外におけるテキスト言語学・テキスト文法の研究史を概観した。続いて、テキスト言語学に対する、本論文の理論面、記述面における貢献について考察した。

第12章では、今後の研究の方向性について論じた。今後の研究で、まず必要なのは結束装置の中で本論文で扱うことができなかった必須項の非出現（いわゆる省略）について考えることである。この問題には、主題連鎖やテキストタイプといった問題が絡んでおり、その解明は容易ではないが、テキストの構造の解明という点からは、これに関する研究は極めて重要なものである、とする。また、接続表現の研究も重要である。それは、接続表現がテキスト解析において極めて重要な役割を果たすものであるからである、とする。

本文400字詰め原稿用紙換算544枚

論文審査の結果の要旨

本論文は、いわゆるテキスト言語学、特にテキスト文法、といった領域への貢献である。テキストが存在する時、テキストを形成する複数の文の間には何らかのつながりが存するが、本論文は、そのつながりの形成に関わる諸現象の中から、テキストの中にあることによって、はじめて文の意味解釈を確定化しうる、そして、そのことによって、文連続に結束性を付与する、結束装置に考察対象を絞り込んで、考察を行っている。考察対象に対する絞り込みの結果、文と文とのつながりを言語形式に基づいて捉えることが可能になり、かつ、そういった結束性を作り出す一群の手段、たとえば、指示表現群を、範例的な対立のもとに分析・記述することが可能になった。本論文が、文と文のつながりを、予測可能性を持った一般的な規則として、描き出すことに成功した意義は少なくない。

本論文は、結束性をもたらす言語上の手段である結束装置の記述的・実証的研究である。本論文が提示しているような、具体的で実証的な記述は、日本における従来のテキスト研究・文章論では、あまり見られなかったものである。その意味でも、本論文の明らかにした言語事実、ならびに本論文が提示した分析・記述の方途は、注目に値するものである。

本論文の評価すべき優れた点は、いくつもあるが、理論的な側面での貢献と記述的な側面での貢献、といった二つの観点から述べていく。

まず、本論文の理論面での最大の貢献としては、その組織性・体系性があまり認められてこなかったテキストに対して、その中から結束性といった現象を取り上げ、それが文法的な手法で研究できることを示した点が挙げられる。文法の問題として扱うということは、現象を一般化が可能な規則の総体として取り扱うことを意味している。テキスト・レベルの現象から引き出される観察が、一般化が可能な規則性にまで高められなければ、テキストに対する分析・記述は、いつまで経っても、厳密なものにはならない。本論文は、そのことにかなりの程度において成功している、と言えよう。

また、テキストの概念や文脈の概念およびそのタイプ、文連続をテキストならしめる一貫性の概念、さらに、先行ないしは後行する文（連続）の存在を前提にして、はじめて、その意味解釈が完結する文のテキスト内における存在、そして、そういった文の存することが、逆に文連続に結束性を与えることなど、つまり、結束装置の概念および内実を明らかにしている。さらに、テキスト・レベルでしか解決できない文法現象の存在、したがって、文文法に加えてテキスト文法が想定されなければならないことを示している。こういったことは、いずれも、従来、明確かつ体系的に述べられることのあまりなかった事柄である。これらを明確に規定づけたことなども、本論文の重要な功績である。

一方、記述面での功績としては、指示表現に関しては、「文脈指示」の内包を豊かにし、従来の知識管理的なアプローチだけでは扱いきれないものがあることを示し、その対案として結束性という概念を導入することの重要性を論証したこと、つまり「トピックとの関連性」「テキスト的意味の付与」というテキスト送信者による先行詞の捉え方の違

いを抽出することによって、「この」「その」「ゼロ」の文脈の中における選択原理を明示化した点が挙げられる。これは、これまでの指示詞の研究では十分には明らかにされてこなかった点であり、この指示表現の選択原理の抽出によって、日本語におけるテキスト形成の研究は、一つの具体的な成果を手に入れたと言つてよい。

また、名詞に関しては、名詞の有する結束性を明らかにした点が挙げられる。つまり、名詞の中には、統語的性質として、「表紙、弟、上」などのように、「Xノ」といった限定表現を必須的に要求する名詞が存在することを明らかにした。そして、その種の項を取るか否かという観点から名詞を分析し、必須項を取る名詞を1項名詞と名づけ、それを取らない名詞を0項名詞と呼び、1項名詞の有する結束性を指摘した。さらに、0項名詞に対しては、他の名詞句への関係づけられ度という意味論的な観点から序列化を行い、各々の類と、たとえば間接照応などの他の現象との相関性を明確に指摘している。この種の指摘は、テキストの結束性の分析・記述への寄与のみならず、名詞の有する意味論的な性格の異なりについても、意義のある知見を提供している。

また、従来考察のほとんど行われなかつた領域への鋏入れが、いくつもなされている。たとえば、「定」「不定」といった概念を、どのようなタイプの名詞句がそれに該当するかをも含めて明らかにしている。そして、「定」を帯びる名詞句として、a. 発話現場に存在する要素、b. 話し手と聞き手が共通に知っている要素、c. 固有名詞句、d. 総称名詞句、e. 指示対象がデフォルト的に一最もあり得そうなものとして一決まる名詞句、f. 指示対象がテキスト内で特定される場合、などを挙げている。さらに、指示対象がデフォルト的に決まるタイプの名詞として、「首相、部長」といった〈役割を表す名詞〉や「兄、父、お爺さん」などの〈親族を指す名詞〉などを指摘している。こういった領域への考察は、日本語の文法研究では、従来ほとんど光の当てられることのなかつた領域への考察であり、その先駆性は、高く評価してよい。

もっとも、本論文にも全く問題がないというわけではない。方法論的な厳密さから言えば、本論文での扱い方はそれなりに妥当ではあるが、その意味解釈の確定化に欠けるところを当の文が有することによる、依存関係に基づく結束力のみを、文法的とするのがよいかは、意見の分かれるところであろう。つまり、接続表現を結束装置から除外し、日本語の結束装置を、指示表現、名詞の項、述語成分にとっての必須成分の非出現に限定するのが、本当に妥当かどうかは、議論の余地が有ろう。また、テキストの中に存在する文と文とのつながりの分析・記述には、接続表現などに対する考察も不可欠であろう。本論文では手付かずのままになっているが、テキスト構造の言語学的な開明を目指す論者にあっては、早晚これらに対して分析・記述を施す必要に迫られよう。

しかし、上述したような点は、本論文全体の価値を損なうものではない。本論文が、テキスト形成において重要な働きをする日本語の結束装置についての、具体的で明示的な分析・記述の方途を開拓し、内実豊かな分析結果を提供し、日本語におけるテキスト文法研究の歩を進めた意義は、極めて大きい。

本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位に十分ふさわしい価値を有するものと認定する。